The Aspects of the Publication and the Reading in the Kaga Domain in the Later Tokugawa Period

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/4708

氏　　名	竹　松　幸　香
本　　籍	石川県
学位の種類	博士（文学）
学位記番号	社博乙第６号
学位授与の日付	平成14年３月22日
学位授与の要件	論文博士（学位規則第４条第２項）
学位授与の題目	近世後期加賀藩における出版文化の諸相 (The Aspects of Publication and the Reading in the Kaga Domain in the Later Tokugawa Period)
論文審査委員	委員長　中　野　節　子 委　員　笠　井　純　一，江　森　一　郎，木　越　　治

学位論文要旨

本研究は，４章にわたり，加賀藩の出版および読書事情を明らかにし，それによって加賀藩の文化の一側面についての解明を試みたものである。

第１章では，本研究の軸の一つである近世金沢の出版の概要と特色について，三都や他の地方との比較を交えつつ述べている。

加賀藩における出版の中心地は金沢であり，地方出版における先進地域の一つであった。それは，民間の出版に関して言えば，書肆の出現した時期が名古屋，仙台，和歌山などの他の大きな城下町と比較しても早いからである。その後，寛政頃から出版が定着し，弘化期以降，本格的な隆盛をみた。しかし，江戸時代を通じて確認される書肆は53軒，出版物は114点で，この数は，名古屋，仙台，和歌山と比較すると格段に少なく，大藩の城下町ということで同じような発展を遂げていたとはいえない。なお，相板などの状況から金沢の出版は京都の出版界の影響をより強く受けていたことがわかる。これは金沢で書肆が出現した頃（元禄期），京都が出版の最大の中心地であったためと考える。しかし，この傾向は天明期に京都から江戸へ中心地の重心が移っても変わらないことから，江戸よりも京都の方が近いという距離的要因もあったと思われる。

また，文化期頃から，全国の販売ルートにのる書肆が金沢にも出現した。中でも松浦善助は印刷・製本，貸本・書籍販売をはじめ，三都の書肆から書籍を仕入れ，他の金沢の書肆に卸す取次業にも及ぶなど，その業務は多岐にわたり，加賀藩の出版・読書文化に大きな影響を与えていた書肆であったことを明らかにした。

一方，加賀藩による出版に関しては，これまで最初の加賀藩版とされてきた『四書匯参』が大坂の書肆の翻刻出版である『四書匯参』の版権を加賀藩が天保10年に買い取って藩版としたものであることを明らかにした。実際に金沢で藩版の出版作業が行われたのは嘉永２年(1849)刊行の『欽定四経』からであるが，この出版作業に関わった職人は京都から招聘したものである。これらのことから，藩版においても，京都および大坂の出版の影響を強く受けていたことがわかる。なお，『欽定四経』以降，藩版の出版は計画されたものの，実際の出版には至らなかった。そのため，金沢で出版された藩版は『欽定四経』のみということになり，他藩と比較しても少なく，加賀藩では藩版出版にそれほど熱心でなかったように思われる。したがって，加賀藩では，藩校の設立や藩版の出版が民間書肆による出版の隆盛を導くには至らなかった。しかし，別の契機すなわち俳諧の隆盛を契機として金沢の出版は隆盛をみた。このことは，江戸時代を通じて，最も多く出版されたのが俳書であることに如実に表れている。

第２章では，俳諧と出版の関係について，金沢の俳人・梅田行直（江波）の日記「北枝堂日記」と氷見の町人・田中屋権右衛門の日記『応響雑記』の二つの史料をもとに検討した。

加賀藩の俳諧は三都の動向に実によく連動しており，特に江戸後期の加賀藩の俳壇は，京都の梅室（加賀藩出身）の影響を受けていた。加賀藩領内では，金沢をはじめ宮腰，氷見などの町で俳諧が盛んに行われ，それぞれの地域に指導者的俳諧宗匠が存在し，その下に俳諧連が形成され，連の構成員が集まって創作したり，他地域の俳人との交流に使用された「場」を持ち，中央とも交流があった。

この俳諧を通じての文化交流において活用されたのが俳諧すりものや俳書である。この俳諧すりものや俳書の出版に関わっていたのが金沢，富山の板木師であった。板木師たちは版元としてのみならず，自身も俳諧を嗜み，俳人としても俳諧を通じて行われた文化交流に参加していた。弘化期以降，金沢の書肆のみで出版が行われるようになるが，その時出版された出版物の大半が俳書や俳諧すりものであった。このように幕末の金沢の出版は，金沢以外の領内の町・村での俳諧の隆盛によっても発展したが，とりわけ金沢，富山の板木師が重要な役割を担っていたといえよう。

第３章では，本研究のもう一つの軸である読書を中心に，金沢の儒者・金子鶴村の『鶴村日記』，加賀藩与力の日記である「起止録」，藩臣成瀬氏の家臣・北村家の蔵書といった史料をもとに，中・下級武士の文化について考察を試みた。

ここでは，まず，読書について考察した。その結果，金子鶴村のような儒者を含む中・下級武士は日常的に書籍に触れることのできる環境にあり，積極的に読書していたことを明らかにした。これらの書籍は，書肆を利用する，あるいは個人同士の貸借を通じて彼らの手元に届いており，書肆を利用する場合は，書籍の種類によって入手方法（購入か貸本か）や利用する書肆を使い分けていた。一方，個人間の貸借においては，上級武士の蔵書が利用されることが多く，鶴村が媒介となって中・下級武士へ貸し出されていた。このように，当時の読書環境や蔵書の形成は，書肆だけではなく，個人間の貸借に負うところが大きく，書籍の貸借やそれによって構築される文化的連携は極めて重要な意味を持つものであった。また，北村氏の蔵書からは，中・下級武士が独自に蔵書を所有していたことがわかる。これらの中には往来物や近道塵却記など日常生活に必要な知識が盛り込まれた書籍が多い。このような書籍は，町人も手にした書籍であり，出版における文化の横断性がみられる。

さらに，漢詩創作・詩会から，上層町人の文化状況についても，その一側面を明らかにした。この考察によって，金沢の上層町人の間では漢詩創作がかなり流行しており，金沢では俳諧，和歌よりも関心が高かったと推測される。彼らは江戸から大窪詩仏を招くなどして，中央の詩壇とも交流していた。また，自宅を「○○楼」と称し，詩会の場として中・下級武士に文化的活動の場所を提供することもあった。そこでは上層町人と中・下級武士との交流があり，さらに直接ではないが，上級武士との交流もみられる。

このように読書および詩会においては，金子鶴村や明倫堂教授であった林周輔など学問をもって藩や藩の重臣に仕える儒者・武士が上級武士，中・下級武士，上層町人各層の間の媒介者となることで文化的連携が形成されていた。なお，町人の詩会に参加していた明倫堂教授の林周輔は家柄町人の一つである亀田家（宮竹屋）と親戚にあたり，金子鶴村も町人の出自である。つまり，彼らは町人と武士の境界的な存在であったといえる。また，上田作之丞のように領内の町へ出かけて町人たちに儒学の講義を行う武士が出現したことなどからも，町人と武士の交流や身分間の融合が進んでいたと思われる。

第４章では，城下町以外での文化交流について，越中・射水郡の和算家・測量家である石黒信由の書籍出版，彼を中心とした書籍貸借を事例とし，農村地域の様相を示した。

信由は加賀藩から外に出ることはなかったが，富山藩士の中田高寛，加賀藩士の宮川安泰，城端の西村太冲に入門し，太冲を通じて伊能忠敬とも交流するなど，領内および各地の知識人たちと交流しながら学問を習得していった。一方，加賀藩では藩校の創設時（寛政４年）から授業科目として算学が設置されており，全国的に早い時期から算学の必要性が認められ，文化期以降は藩士の間で関流算

学が流行するまでに至った。

このような状況の中，加賀藩士の信由への入門，あるいは信由の藩の測量事業への参加･従事によって，信由は藩士に算学・測量の知識・技術を提供することにより，加賀藩の治政，実学の展開に影響を与えていた。一方,加賀藩士は書籍の貸借や調達を通じて信由の学問展開に寄与していた。つまり，在村知識人と武士の交流により学問が発展し，藩全体の文化にも影響を与えていたのである。

以上のように，本研究で取り上げた出版，俳諧，漢詩，算学の事例では，いずれにおいても加賀藩領内の交流，さらに中央および全国各地方と交流がみられ，その交流は各身分層間の隔てを超えるものとなった。つまり，加賀藩の文化は大名文化，武家文化として武家に限られたり，その出発点が武家に集約されるものではない。また，藩領内だけで完結しているものではなかった。

これまで強調されてきた，加賀藩の文化は大名文化であるという位置付けは，加賀藩の文化は大名および武士が作り上げた文化であると規定するものであり，正しい金沢の姿を描くものではない。

本研究に則していえば，加賀藩では出版および読書が媒体の一部となって文化ネットワークと呼ぶべき文化的連携を構築していた。その連携では主に中・下級武士が活躍していた。しかし，それは，彼らの階層の中だけで連携が完結するのではなく，町人（主に上層町人）や在村知識人（主に豪農）と交流することで，さらに文化的連携を拡大していった。

このように加賀藩では，藩主，上級武士，中・下級武士，町人，農民それぞれの階層で領内および全国との交流がみられる。そして，彼らがその交流範囲を拡大することによって，加賀藩の文化は熟成・発展していた状況であったと結論付けることができよう。

Abstract

This paper describes the cultural movement in the Kaga domain around to the publication and the reading.

First, based on my research on the publications and the publishers of the Kaga domain, I describe the outline and the characteristics of publication in the Kaga domain.

Next, I researched the prosperity of Haiku culture in the Kaga domain in the later Tokugawa period. I chose Kanazawa and Himi as detailed case studies. Based on my researches on "Hokushido - Nikki（北枝堂日記）", the diary of Koha (the pen - name of Umeda Yukinao, a painter retained by the Kaga domain) and "Okyozakki（応響雑記）", the diary of the Himi merchant Tanakaya Gon'emon, I examined the *haikai*, the groups of poets who collaborated in linked verse, and found that the hangishi（板木師）(woodblock carvers) living in Kanazawa and Toyama were involved with and supported the brought about the development of publication in Kanazawa.

Next, I investigated the general reading habits of the populace and the Chinese Classic circles mentioned in "Kakuson Nikki（鶴村日記）", the diary of a scholar of the Chinese Classics ; "Kishiroku（起止録）", the diary of a Kaga-domain *yoriki*（与力）(lower - class samurai) ; and the Kitamura family's library. I then describe the cultural situation of the middle and lower class samurai. I also refer to the cultural situation of the upper class merchants.

Next I take up surveying and mathematics in order to study the cultural exchange in the rural districts. This study comes from notes on book borrowing and lending by Ishiguro Shinyu and his group. I describe the interchanges between Kaga retainers and Ishiguro Shinyu, the leader of this cultural exchange.

From the above cultural situations, I elucidate on and show the shape of the cultural situation in the Kaga domain. In general, the daimyo culture had an important role. However I would like to make it clear that the main culture in the Kaga domain was constructed from the cultures of all classes, not just the daimyo. Furthermore, the culture was deeply interconnected with the national and local cultural exchange.

論文審査結果の要旨

これまで，近世の都市における出版は，幕府直轄都市の三都と，大藩であった仙台，名古屋などについて研究されてきたが，近世の最大藩であった金沢については研究が立ち遅れており，研究の必要性が唱えられてきたものである。竹松氏の本論文では，執筆者の新発見も含め，近世の金沢で出版され，現在確認できる全ての書籍（全114点）を調査し，解題・解説を付している。地道で実務的な研究であるが，近世出版史においては優れた業績を残すことになった。

本論文はまた，上記の基礎的研究を土台とし，出版にまつわる諸要素，書肆の実態，貸借本の流れ，作者と読み手の文化および交流を扱って，加賀藩内の文化論となっている。具体的には，俳諧・漢詩にまつわる文化，地方豪農の学問と交流を扱っている。

まず，出版物については，江戸時代後期に俳書出版を軸として，地元の作者と結び付いた形で展開したと指摘している。書肆の方ではその業務が，印刷・製本，販売の他，貸し本，京都などの書肆の取次ぎなどに及ぶとする。また，他の書肆との相版（共同出版）もあり，出版の伝統を持つ京都の書肆との関係が大きいとする。

一方，俳諧を媒介とする交流を見るため，金沢と在郷町氷見（現氷見市）の史料を挙げている。金沢の俳諧は梅室が中央俳壇で活躍していたが，梅室の弟子である多数の俳諧師匠，さらにその下に裕福な町人を構成員とした俳諧連が出来ており，活動が盛んであった。1850年代以降において，金沢の板木師（印刷業者，版元）やすりもの師が版元となって，俳諧摺物や俳書の出版が盛行した。これらの出版物は俳諧連の仲間同士の交流や，他地域の俳人との交流に利用された。氷見でも町年寄りなどの有力町人によって形成された俳諧連が存在し，金沢や輪島の俳人との交流がみられた。一方，氷見には板木師がいないので，金沢や富山の板木師に刷り物を依頼しており，金沢のみならず地方の俳諧の隆盛が金沢の出版を興隆させている。

次いで，金沢に居住する儒者や中・下級武士の日記や記録類から，近世後期における彼らの読書のあり方と，詩会（漢詩の会）の状況を検出している。儒者である金子鶴村の読書では，漢籍や漢学書などの専門書が圧倒的に多いが，一方では外国地誌や海防に関わる書籍も見られ，当時の外国船出没という社会事象に敏感に反応していたことが判る。読書本は貸し本と購入書だが，貸し本は金沢の書肆を利用し，娯楽用の書籍が多い。購入書は学問上の専門書が多く，主に京都の書肆を利用している。個人間での本の貸借もあり，その場合，上・中流武士，藩校関係者や寺院との関係も深い。他方，下級武士でも蔵書目録を持つなど，積極的な読書傾向がうかがえる。漢詩の創作や詩会については，金沢の上層町人も加わっており，身分を超えた文化の交流を紹介している。

最後に越中射水郡和算・測量家である石黒信由の和算書出版と彼をめぐる読書の状況を見て，郡部での学問・教養のあり方と，上層農民と金沢の中・下級武士との交流を検討している。石黒信由は19世紀前期に活動しているが，和算書を2点出版している。出版は京都で行なわれ，十数両と言う出版費用は，信由をめぐる上層農民や信由に入門した金沢の武士達の分担で賄われている。この分担のあり方は，即ち学問交流の関係を示している。特に中・下級武士との交流においては，信由が武士達に算学や測量の知識を提供し，加賀藩の実学の展開に寄与しており，一方で，加賀藩士は書籍貸借や書籍の調達を通じて信由の学問の向上に寄与していたと言える。

以上，本論文は地域を越え，身分を越えた近世文化の一側面を動的に析出することに成功している。

審査委員会では，まず上記のような出版にまつわる研究の貴重さを認めた。さらに，従来，文化と言えば「大名文化」・「武士文化」といわれる金沢の文化論に対し，多角的な調査を通じて，金沢そして加賀藩の文化の実態に迫った研究を注目すべきものと認め，博士号の授与が適当であることで意見の一致を見たものである。